You Are Delicious！

ゆん@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｙｏｕ　Ａｒｅ　Ｄｅｌｉｃｉｏｕｓ！

【Ｎコード】
Ｎ３３５５Ｗ

【作者名】
ゆん@

【あらすじ】
とある男が死んで異世界に生まれ変わって女の子になる話。目指せハーレム、最強の戦士！　…なんて思ってたらそれどころじゃなかったっていう、お涙頂戴にもならない微妙な人生。どうしたものかと悩んでいたら現れた、他称運命の相手（♂）。やけにヤル気な周囲の人間に押されつつ、嫌嫌言いながら仲を深める（かもしれない）淫魔系男前女子とツンデレ系美人男子の性別逆転ラブコメデー。

一話：どこから狂った人生計画

今の自分の心境を一言で表すなら、「Ｊｅｓｕｓ！」に尽きる。日本人的に「おお神よ…！」でも構わない。
兎に角呪った。若しくは助けて欲しかった。こんな筈では無かったと、心の底から思う。可能ならば頭を抱えて座り込んで意味の無い言葉を喚き散らしていたかもしれない。
自分という人間の１９年＋１８年、合計３７年間でせっせと積み続けたアイデンティティとも言うべきものが、今正に跡形も無く崩れ落ちているのだ。それもたった一人の男の手によって。
それは今まで生きてきた中で初めて感じる、深く激しい絶望だった。

葛見　陽祐、６月１７日生まれＯ型。
裕福でも貧乏でも無い正しく平凡な家庭に生まれ、クラスの人気者だったとか陰気なぼっちだったとかでも無くそこそこ友人にも恵まれそれはもう穏やかに幼稚園から高校までを過ごし、そこそこの大学への進学したばかりの軽いオタク。
享年１９歳。信号無視の車に真正面からぶち当たり、恐らく即死。
死ぬまで童貞だった事が唯一程度の心残りである。

ふと目を覚ましたらどこからどう見ても異世界でしたっていうのは、恐らく人生で初めての面白体験談だ。

生前、というか前世からの大らかさ、つまりは大雑把具合をそのまま引き継いでしまった形の転生先は定番の魔族・魔法なんでも御座れのファンタジー世界だった。

新しい両親はちょっと雰囲気の妖しい美男美女、目を覚ました瞬間小さな視界にいっぱいに写り込んだその人外レベルの美しさに陽祐は混乱しながらも「これで勝つる」と心の中で小さなガッツポーズを決めた。
一昔前には世の平均的な中学生と同じく厨二病を経験した事もある陽祐は数日経ってやっと理解した自分の状況に再びガッツポーズを決めた。
異世界転生、ファンタジー世界、なんだかチートっぽい雰囲気漂う転生先の自分のスペック。

結論、これで楽しまなきゃ男じゃない！

取り敢えず剣を使えるようになってみたい、前世では剣道どころかスポーツさえまともに習った事無いけどまあきっとイケる。
魔物退治もやってみたい、正直戦うっていうのは想像するだけで怖いけれど折角の前世記憶持ち異世界転生、前述した通り楽しまなきゃ以下略。
ともすればいつか読んだ異世界トリップ物の主人公みたいに美人で可愛いおにゃのこ達を囲ってハーレム紛いの真似が出来るかもしれない！
大きくなったらこれがしたいああなりたい、なんて一部子どもが考えるには不純過ぎる動機で将来を夢見ていた陽祐は気付いていなかった。そして気付いた時大いに泣いた。それはもう泣いた。身体中の水分が昇華されるんじゃないかって勢いで泣いた。

当時１３歳。４年前の自分のあまりの取り乱しっぷりを思い出して、陽祐は覇気の喪失した息を吐いた。その憂えた表情さえ、ファンには見逃せないご褒美らしかった。隠しきれていないその熱い視線にもう一つ、ため息が落ちる。
陽祐が夢見る理想への最大のハードル。それに触れて、もう一つた

め息。

爽やかな風に揺らされるサラサラの銀髪。大きく深く透き通ったアメジストの眼。染み一つ無い真っ白な肌、ピンク色のぷるぷるなくちびる。極めつけに出るとこは出て締まるとこは締まった全女子憧れのスタイル。

葛見　陽祐改め、ジークリンデ・オイレンベルク。

性別、女。

現在１８歳の誕生日おめでとうパーティの真っ只中である。

１８年間住み続けて尚慣れない広大なゴシック建築の邸宅、基自宅。馬を全力疾走させて尚余りある向こう側の見えない庭は、見慣れた顔ぶれや知らないおっさんおばさんで溢れていた。

…マリンカラーのドレープが綺麗なドレスが悲しい程似合う自分が悔しい。

「ジークちゃん、楽しんでる？」

「勿論です母様」

「なら良かった。今日の主役はジークちゃんなんだから、もっとワガママ言ってくれても良いんだからね？」

前世１９年間の庶民感覚が染み付いているせいでこういう貴族丸出しの場所はどうにも居心地が悪い。

ひと通りの挨拶を終えて思わず隅へ隅へと移動してしまったジークリンデを引き止めたのは他でも無い、この世界での実母だった。

イドゥベルガ・オイレンベルク。太陽に眩しい艶やかな金髪とジークリンデが譲り受けたアメジストの瞳を持つ、超絶グラマーな年齢

不詳のお姉様である。
因みに年齢は本当に分からない。過去に一度それとなく尋ねたら割と本気で魔法をぶっ放されて以来、それはオイレンベルク家の禁則事項になった。

「ジークちゃんは昔から大人しくて他人の意見ばかり優先する子だから…、それはそれで嬉しい事だと思うけど、お母さん的にはもっとワガママも言って欲しかったのよ？」
「母様…、ありがとうございます…」

思い掛けない言葉に思わずじんわり来てしまう、色んな意味で。いけない、ここで泣いたりなんかしたら男として格好がつかない。女だけど。

「（ごめんなさい、俺別に他人の事ばかり優先する優しいおにゃのこじゃないんです、唯単に自分の意見言うタイミングが掴めなかっただけで…）」

それと言うのもこの性別・女、精神・男の見事な捻じれっぷりのせいだ。
意見を求められたりあれがしたいこれが欲しい、と思ってはいても、これは自分が男だからこう思う訳で、戸籍上は女である人間がこれを言ったら可笑しいんじゃないか、じゃあこっちなら良いのか…なんてあれこれ考えている間にいつの間にか話は進み、結果誰の意見で良いんじゃないか、どちらでも良いです、なんてある意味日本人の鑑な解答ばかりになってしまっていたのだ。
自分の心の赴くままに「可愛いおにゃのことにゃんにゃんしたいいいい」なんて叫んだら直ぐ様病院送り決定である。

「…でもまあ、これからはそんな事も無くなるとは思うけどね」

「…え？」

なんか今不吉な言葉を聞いた気がする。
異次元に飛んでいた意識を戻して恐る恐る母親を見ると、彼女の笑顔はいつの間にか穏やかな母の慈愛から悪巧みを仕掛ける際の小悪魔なそれに変化していた。
瞬間、背筋をゾッと冷たい物が走る。もしかして自分の精神が男だという事がバレてしまったんだろうか。

「か、母様？　それは一体どういう…」
「ふふっ、内緒よナ・イ・ショ！　その方がきっと貴方も楽しいわ」

とても子を持つ親とは思えない子どもっぽい言い様だったが、それすら違和感無く受け入れてしまいそうだから怖い。
何よりこの人にとっての「楽しい事」は自分や父にとっては「困った事」にしかならないのだ。
食い止めなければ。それが無理なら、せめて内容の切れ端だけでも掴んでおきたい。

「母様ぁ…」
「大丈夫よジークちゃん。悪い方にはいかないから！」

これは何かある。自分の身に何かが起こる、絶対に。そしてそれは今まで通りに「困った事」にしかならない。絶対にだ。
一体何がと考えては見ても想像もつかない、これも今まで通り。
でもこのまま放置すれば自分の人生に何かが起こる、それも恐らくは取り返しのつかないどでかい何かが。

「（取り返しのつかない「何か」なんて性別・女ってだけで充分過ぎるくらいなんですけど！？）」

途方に暮れて離れた父親にＳＯＳの視線を投げてみても、彼は丸々太った貴族のおじさん共に囲まれたまま苦笑を返すだけだった。
そんな笑顔もまたイケメンです父様！

一話：どこから狂った人生計画（後書き）

とりあえず一話です、まだヒーロー（という名のヒロイン）出てきてませ、ん…。
更新速度バラバラだと思いますがよろしくお願いします。

二話：現実が過酷過ぎて生きるのが辛い（前書き）

終盤にＲ１５表現入ります。ちゅーだけなので大丈夫だと思うのですが、もし指摘があるようならすぐに変更致します。線引きがいまいちよく分からない…。

二話：現実が過酷過ぎて生きるのが辛い

暗い夜空にいっぱいに輝く星は前世生きたあの世界と何も変わらない。ただ今だけは、あの頃よりずっと星に近い。飛行魔法はジークリンデが言葉を喋れるようになって初めて覚えた魔法で、今でも一番のお気に入りだった。

眼下に居並ぶ街は今は碌な街灯一つ無く目を凝らしても僅かな輪郭が見えるばかりだ。ジークリンデが密かに憧れる下町ならばまだまだこれからが大人の時間なのだろうが、生憎ここは帝都の隅も隅、鬱蒼と木が立ち並ぶ森と称して然るべき一応『草原』の周囲にポツポツと民家が点在する程度の、所謂田舎なのだった。

銀色に煌く月の光だけを頼りに眩しい星空をふよふよと漂う様に飛ぶ姿はまるで海の中のクラゲさながら。

両親には秘密にしているこの深夜徘徊はジークリンデにとって既に慣れたものだったが、今夜ばかりは心持ちが違う。

「（結局何も分からなかった…）」

自分がワガママを言わない事に対しての「これからはそんな事も無くなる」だという事はつまり、これからは嫌でもワガママしなければならないという事なのか。ワガママにならなきゃいけないってどんな状況なんだか想像もつかない。可愛い女の子を嫁にしたいと言っても良いのだろうか。

どんなに考えても一向に答えに辿り着く気がしない、俺の脳みそはこんなにもツルツルだ…。

或いはこんな捻れた性別でさえなければこんなに悩まずに済んだのかもしれないけれど、そんな事は今更言及したところで何よりもどうにもならない。

こうやってフラフラ散歩して回る事すらトラブルへの第一歩な気がしてしまう。
この世界での成人は男女共に１８歳、つまり今日は成人して初めての夜なのだ。
…なんでこんなにビクビクしながら出かけなきゃならないんだろう。

「今日はもう帰ろうかな…」

ゆっくり休んで、明日の朝になったら改めて両親に説明を求めれば良い。
ああでも、寝てる間に羽が生えたり全身緑になってたりしたら困る。非常に困る。
もうどこにいても少しも落ち着けない。こんな感じで大丈夫なのかと不安が肥大して将来まで心配になってくる。見事なネガティブ・スパイラルだった。
俺ってつくづくチート主人公タイプなんだか巻き込まれ不憫タイプなんだか分からない、と、器用に空中で頭を抱えて蹲ったところで。
唐突に視界に割り込んできた『それ』に一気に思考を奪われる。

「あれは…」

真下に広がる草原、若しくは森の中心辺りにぽっかりと口を開けた空間がある。月から注ぐ輝きを溶かして揺れるそれは、ジークリンデが初めて見る場所だった。暗くてはっきりしないが、それは小さな湖のようだった。
一見なんの変哲も無いその場所から、何故か視線が張り付いて離れない。どうしてもそこにいかなければならない気がする。早くあそこへ行けと、自分では無い何かが促していた。
…これは普通じゃない、絶対に。もしかしたらこれこそが母親の言っていた事態の予兆なのかもしれない。行けば何かが起こる、それ

が良い事か悪い事かは知れないけれど。
自分にかけた飛行魔法が不意にぐらついて慌てて体勢を立て直す。
前に進めばイベント発生はほぼ確実、それも恐らく自分にとってはあまり嬉しくない方面だと思われる。けれどこのまま後ろに下がれば、思考回路はまた意味の無い堂々巡りを繰り返すだろう。このイベントが明日も明後日もここで待っていてくれるとは限らないのだ、今を逃せばもしかしたら一生この居心地の悪さと付き合っていく事になるかもしれない。

「…よしっ」

男は度胸！　女だけど！
スベスベの頬を叩いて気合を入れ直し、魔界への入り口にも見えるそこに降下した。

右よし、左よし、前後よし。怪しい物影は今のところ見当たらない。
周囲の警戒は怠らずに数時間ぶりの地面に降り立った。
さあ何が来るんだ。湖の底から封印されていた魔王が数千年ぶりの復活を果たすんだろうか、それとも幻の精霊と契約して世界を救う英雄になるのか。前者は勘弁だけど後者ならば幼い頃の空想物語を実現出来るかもしれない。

「ん…？」

若干手が震えているのはあくまでも武者震いだと自分で自分に言い聞かせ、湖の畔をさくさく歩く。
その前方に、一つの人影。湖の縁に腰を降ろし、足だけ水に浸した

知らない誰かがいた。
見間違いでは無いその姿を認めた途端、腰の辺りからスーッと何かが抜けていく感覚がする。
ああやっぱり怖い、出来れば今直ぐ回れ右をして何も知らない顔であの馬鹿でかい自宅に戻りたい。
それでもうっかり抜け出た勇気とやる気を何とか取り戻し、そろそろと摺り足で近付いていく。暗闇の中で眼を凝らしその人を盗み見て、思わず呼吸が止まった。

周囲の巨大な樹木に遮られていた筈の月の光が、まるでスポットライトの様にその人の姿だけを照らし出す。
目を見張るほど艶やかな紅色の髪。未だこちらに気付いていない無防備な眼は初めて見る金色だった。この暗さでも分かるほどに顔立ちは甘く整っていて、今にも消えてしまいそうな儚さはまるで天使か妖精か、とにかく酷く神聖なものに思えた。
さっきまでトラブルの予感に縮み上がっていた心臓が、一気にばくばくと激しく脈打つ。
その人の美しい顔立ちは、ジークリンデのタイプど真ん中だった。
前世か今世か、或いはどちらの時も都合の良い妄想を全開にして描いた幻の女性の姿。
正にジークリンデの理想がそのままそっくり現れたかの様な容姿の、『男』が、目の前にいた。

「ふっざけんなちくしょおおおおおおおおおお！！」

と、身も世もなく叫んでいたかもしれない。いつもの彼女ならば。
けれど今回は、そうはならなかった。
…視線が、意識が丸ごと彼に向かったきり離れない。離そうとも考えつかなかった。
心臓は相変わらず過去最高速で脈動を続けている。既に数年分くら

いは寿命が縮まっている様な気がする。
だけどずっとこのままでいたい。もっとこの人の傍にいたい。近付きたい、触れてみたい。
後で思い返しても信じられなくて頭を抱える心境だが、この時のジークリンデにとっては性別なんて眼中に無かった。本当に信じられない、信じたくない。

自分でも思い切り凝視してしまった自覚のある視線に気付いたのか、遂に彼がジークリンデを振り向く。
その印象的な金に間抜けに棒立ちするジークリンデの姿が写り込んだ瞬間、大きな瞳が驚きに見開かれた。

「貴方――――…」

酷く耳に馴染む穏やかなテノールがその薄いピンク色の口唇から溢れた瞬間、ジークリンデは自分の中で何かの糸が切れる音を聞いた。
今まで全く動かなかった足が嘘の様にその人に近付いていく。
我慢出来ない。この人の肌に触りたい、あの美味しそうな口唇を思う存分味わいたい、華奢には見えるが決して柔らかくは無いだろうその身体を全て晒して、思いつく限りの行為で乱れさせたい。めちゃくちゃにしてやりたい、この人はどんな声で快感に泣くんだろう。
欲しい。
髪の一筋から足の爪先まで一片も残さず、この人の全てが、欲しい。

「っ、ん…っ！？」

重ね合わせた口唇から、じわりと何かが入り込んでくる感覚を覚えた。
今まで食べたどんなものより甘くて美味しい。
もっと欲しくなって息苦しさからか薄く開いた口唇にするりと舌を

滑りこませる。
…どうしたらこの人とずっとこうしていられるんだろう。もうこのまま家に持って帰りたい。そうしたら一日中こうしていられる。母様ももっとワガママを言っても良いと言ってくれた。だったら許してくれるかもしれない、この人を家に連れて帰って自分の部屋に閉じ込めて、誰にも見せずに自分だけのものにしてしまう事も。深く絡ませた箇所がじんわりと疼く様な熱を持つ。気持ちが良い。

「（みつけた）」
「ふ、…っも、嫌だ、ってば…！」
「――――あれ？」

大して力の入っていない拳で叩かれた瞬間、急激に意識が浮上する。理性を取り戻したというべきか。まるで夢でも見ていた気分だった。そして、それ以上の言葉を失った。
目の前には名前も知らない初対面の美しい男の姿。その顔が、今にもキスしてしまいそうな近さにあって思わず顔を離す。

「（…って、え゛！？　なんでこんな近いの！？　つーか押し倒してる、もしかしなくてもこれって俺がこの人押し倒しちゃってる！？　なんでこんなんなってんの何やってんの！？）」

妙に熱くなった身体が一気に冷める。どうしてこんな事になっているのかを必死に思い返して、更に血の気が引いた。
何をやっているのかと言われれば答えは一つだ。見知らぬ人を押し倒して有無を言わさず口唇を奪っていた。しかもかなりがっつりと。

「…、…！」

自分は一体何をとち狂っているんだろう。出来れば夢であって欲し

い。
けれど、舌先に残る痺れた様な甘い感覚と、未だ自分の下にいる彼の整わない息遣いから、否が応にも現実を知る。
彼の容姿は確かに好みだ。そりゃあもうどタイプだ。これが性別さえ違っていれば土下座してでも交際を頼み込める。
けれど、彼は男だ。絶世の美少女として大人気で、婚約者の申し込みが後を絶たない自分と負けず劣らずの端麗な容姿のくせに男なのだ。股間には聖剣エクスカリバーだってちゃんとついている筈だ。
それなのに、どうしようもなく彼が欲しいと思っていた。深く重ねた口唇は癖になりそうなくらい気持ちが良かった。今も気を抜くとまた我を忘れて襲ってしまいそうだ。
どう頑張っても誤魔化せない。

自分は確かにあの時、彼に欲情していた。

「こんなの嘘だあああああああああ！！！！」

自覚した瞬間、ジークリンデは眼が熱くなるのにも気付かずに飛行魔法で一気に飛び上がる。
前世含めて37年間ずっと女の子が好きだった。中身が男なせいで無駄な悩みもたくさんあった。前世では叶わなかった童貞卒業という一大イベントを今世こそ果たしてみせると心に決めていた、女の子の身体だけど。
前世記憶持ち中身男外見女という特殊環境の中でも、なんだかんだ言いつつ楽しんでもいたのだ。いつどんなおにゃのことイチャイチャにゃんにゃん出来るんだろうとこっそり胸を踊らせていた。のに。
ファーストキスの相手が男だなんて。
みっともなくボロボロと涙を零しながら全力で帰路に着くジークリンデの耳には、一方的に襲い掛かった相手の「それはこっちのセリフなんだけど…」という呟きは、当然届いていなかった。

二話：現実が過酷過ぎて生きるのが辛い（後書き）

ジークリンデさんご乱心回。
突然理性を吹っ飛ばし唐突に我に返り号泣しながら逃げ帰りました。
襲われた相手にしてみれば完全に変質者である…。

三話：人生１８年目にして

衝撃の一夜がいよいよ明けようとしている。
正体不明の謎の男から全力で逃げ出したジークリンデは、そのまま脇目も振らずに自宅へと飛び込んだ。
出て行った時に鍵を開けておいた窓から部屋へと戻り、そこでベッドに突っ伏して改めて思い切り泣いた。１３の時、自分が女であると気付いた以来の大号泣だった。

ボロボロと大粒の涙を流し続けて数時間、そろそろ涙も尽きてきて落ち着きを取り戻した脳内でゆっくりと事件の検証を始めてみる。
まず、自分と湖の君（仮）は初対面だ。名前も知らない。あんなもろタイプの美人がいたら例え性別が何であろうと忘れる筈は無いのだから、これは確実だ。
そしてその人物に丸ごとごっそり心を奪われ、気付いたら問答無用で押し倒してべろちゅーをかましていた。これは否定したくても否定出来ない厳然たる事実である。
そしてその直後に唐突に我を取り戻し泣きながら脱走。
…気でも触れていたんだろうか。

「（いや、でも明らかに可笑しい）」

一連の行動の最大の疑問点はやはり、『相手が男であると分かっていながらそんな事が微塵も気にならなかった』事だ。
それは普段のジークリンデならば絶対にあり得ない。
ジークリンデには前世の記憶がそっくりそのまま残っている。人格や物の価値観など何一つあの頃と変化が無い。ここが前世過ごした世界とは全く別物であるという事、性別や容姿を覗いて中身は陽祐のままなのだ。

だからジークリンデは女の子が好きだ。付き合うのもキスをするのもセックスをするのも、勿論女の子が良い。結婚に関しては今のところあまり深く考えていない。
『同性』である男と何かがどうにかなるなんていうのは、一度足りとも想像すらした事が無かった。陽祐はホモだった事なんて一度も無い。
…だから13にもなって自分の性別を理由に泣く羽目になった。持ち前の脳天気さで物凄く漠然と「どうにでもなる」としか考えていなかったジークリンデは13歳のその日、自分が女であるという事実を初めて自覚し、その重大さに泣いたのである。閑話休題。
…とにかく、もう後数時間もすれば両親も目を覚ますだろう。今度こそ問い詰めて、答えを聞き出さなければならない。
自分が『ああ』なってしまった理由として今一番考えられるのが、昨晩の母親の問題発言関連だと思ったからだ。

「あらあら、ジークちゃんったら手が早いんだから」
寝起きのイドゥベルガを捕まえて事情を説明した後の第一声にジークリンデはがっくりと項垂れた。
…そんな子どもがお漏らししちゃったみたいに言わなくても。これはお漏らしよりずっと大変な問題なのだ…たぶん。
「かあさま…」
「ふふ、そんなに気にしなくても大丈夫よジークちゃん。…まあ、相手の方の事を考えるとちょっと急ぎすぎたかな、とは思うけれど」

私達は誰でも通る道だから。
そう言われて落ち着けば良いのか尚更不安になれば良いのか分からない。
この世界の女性は男性を見ると皆あんな風になってしまうんだろうか。それってどうなんだ。

「…だって私達は、サキュバスですもの」

———ブラルボーデと総称されるこの世界に点在する国の一つ、ジークリンデの住む国でもあるここゼルフカンド帝国は、ローデンスブルク大陸最大の国であり、とある理由から周囲の国々に酷く恐れられ、ここ数十年戦争らしい争いをした事の無い平和な国だ。
その理由というのは、ゼルフカンド帝国がこの世で唯一『魔族との共生』を成功させている国だからだ。
そもそもこの世界で『国』といえばそれは人間の住む場所だ。ジークリンデも生まれたばかりの頃は毎日の様に驚いてばかりだったエルフや獣人、悪魔等という所謂『魔族』が住む場所は人間とは別に確りと区別されており、深い森の中や険しい山奥等に小さな村や町を築いて生活するのが常識なのだ。

けれどこのゼルフカンド帝国にはそんな常識は通用しない。
国に住もうとなればそれこそ下町の片隅、スラム街にも見紛う地域でこっそりと身を隠しながら生活するしか選択肢の無い筈の彼らは、この国では一人一人が人間と何ら変わらない待遇を受ける事が出来る。国に貢献し貴族の地位を貰った魔族もいるくらいだ。
人間が支配する国で差別にも等しい扱いを受ける魔族にとってみれば正に楽園。
荒れ果てた辺境の小さな集落より大勢の人が集まる国の方が豊かで栄えるのは当然の摂理だ。ゼルフカンド帝国への移住を希望する魔族は年々増え続け、建国されて早数百年、今ではこの国の魔族の割

合は全体の人口の４割を占めるまでになった。
そしてそんな魔族達の人間を圧倒する戦闘力を恐れ、周囲の国々はゼルフカンド帝国とは絶対に戦争をしない。
ゼルフカンド帝国にとって魔族の存在は、日常の中でも、また平和に過ごす為にも必要不可欠となりつつあった。
そしてジークリンデは生まれて以来ずっと自分は人間だと思っていたのだが、どうやらそうでは無かったらしい。

「…さきゅばす？」
「そうよ」
「サキュバスってあの…あの？」
「ええ」
「男の人襲ってえっちい事する…あの？」
「そのサキュバスよ」
「…人間じゃなかったんですか！？」

この世界に生まれ直して早１８年。
実は魔族だったらしいです。

「そ、そんな…そんな事、知らなかったです…」
「言ってないもの」
「あっさり！？」

それって大事な事なんじゃないんですか！？
思わず泣きそうになりながら詰め寄るジークリンデをサラリと流し、イドゥベルガは朝の日差しにも負けない眩しい笑顔を浮かべた。

「だってその方が楽しいでしょう？」
「（…貴方だけがね…！）」

思わず握り締めてしまった拳を全力で抑える。
怒っちゃ駄目だ怒っちゃ駄目だ怒っちゃ駄目だ怒っちゃ駄目だ…！
この人に悪気は無い。…恐らく。

「…それで、その…。私がその湖の人にしてしまった事は…サキュバスである事と、何か関係があるのですか？」
「ええ、勿論。…その湖であった男の人は、きっとジークちゃんの運命の星なんだわ」

母曰く。
その昔、サキュバスやインキュバス、吸血鬼等の人間を餌として生きる悪魔族にまだ『運命の星』が存在しなかった頃。
彼らは酷く自由で奔放だった。人間の事情を考慮する事などあり得ない、好きな時に人間を襲い好きなだけその生命力を貪った。
そのせいで悪魔と人間の関係は悪化の一途を辿り、遂に種族間での戦争も間近と迫った時代。
天上からこの世界を見守っていた女神の一人がそんな現状を嘆き、それを解決する為に悪魔達に一つの『運命』を与えたのだ。

『この世界にたった一人、運命の人が存在する。そのたった一人だけが、貴方に最上の幸福を全て与えてくれる者になる』

それが、自分にとってたった一人の『運命の星』。
そして女神様から運命を与えられた悪魔達は、無闇矢鱈と人間を襲う事を止めそれぞれの運命の星を探す事に夢中になった。
たった一人のその相手は、自分にとって今まで出会った誰よりも美しく、愛おしく、そして何よりも美味しい。最高の餌であり、それはいつしか彼らが馬鹿にしていた愛になっていった。
そんな悪魔の変化に戸惑いながらも少しずつ彼らを受け入れ始めた人間。

そうして長い長い時間をかけて、二つの種族は今、他のどの種族間より深い絆で結ばれる関係になった。らしい。

「でも、悪魔族が自分の運命の星に出会える確率は、正直とても低いのよ。この世界中、どこかの国で暮らしているかもしれない誰かが自分の運命の人なんだから…。運命の『星』っていうのは、そういう意味で名付けられたのよ。夜空に浮かぶ星の中からたった一つを見つけるみたいだって。だからジークちゃんはとても幸運だわ」

力に目覚めたその日にいきなり運命の人に出逢うなんて、凄くロマンチックねジークちゃん。

そう言って彼女はとても嬉しそうに笑った。その笑顔を、上手く直視出来ない。

「（運命…運命の相手が、男…）」

衝撃の事実を二つ同時に知ってしまった。

…どうしよう、一刻も早く逃げ出したい。

三話：人生１８年目にして（後書き）

※ちょっとだけ補足
この話ではサキュバス・インキュバス・吸血鬼などを『人間の生命力を栄養にして生きる魔族』としています。彼らの事は全体として悪魔族と呼びます。ジークさんは悪魔族のサキュバスです。
サキュバス→人間の男を性的な意味で襲って生命力を奪う女の魔族
インキュバス→人間の女を性的な意味で襲って生命力を奪う男の魔族
吸血鬼→人間を襲って血液（と一緒に生命力）を奪う魔族

人間に食べ物の好き嫌いがあるように彼らにも個人個人の好みがあり、人間の生命力にも一人一人味の違いがあります（悪魔族にしか分からない違いですが）。そんなジークさんの最高のご飯、基運命の人がまだ名前も出てこない湖の君（仮）なのです。

それから魔族と魔物の違いですが、単純に
魔族→それなりに知性があり意志の疎通が可能な存在
魔物→本能だけで生きている、人を見れば問答無用で襲ってくる存在
という分け方をしています。

四話：一難去って、また

「…ごめんね、何も言ってあげられなくて」
「…父様のせいじゃありません」

などと言いつつ、そっぽを向いていつもより尖らせた声音を隠そうともしない様子は、一目見て「こいつ拗ねてる」と分かる姿だった。勿論、わざとである。

この世に生まれてから18年間秘密にしていた事をあっさりと告げられてしまった後、嫌に上機嫌でどこかへ出掛けるイドゥベルガを見送ったジークリンデはすかさず父・メルヒオールの部屋を訪ねた。自分と同じサキュバスである母と結婚した父は、恐らく母親の運命の星の筈だ。それならば何か詳しい話を聞けるかもしれない。あの母親のハイなテンションには頭の奥が警鐘を鳴らしていた様な気もするが、そこまで気にかける余裕は今のジークリンデには無かった。

「もっと早く色んな事を話しておいてあげれば、ジークがこんなに悩む必要も無かったんだろうけど…。サキュバスのルールには、人間の私が口を出す事は出来なかったんだ」
「サキュバスの、ルール…？」
「そうだよ。別にサキュバスだけじゃなくて、エルフにはエルフ独自の、竜族には竜族だけのルールがあるんだ。…ジークは自分がサキュバスだって分かったんだし、もう話しても大丈夫だね」

種族内のルールはそれぞれの信仰や歴史、伝説などの要因からそれはもう多種多様に存在する。
今回ジークリンデに関係してくるルールはそんな中の一つ、『悪魔

族の子どもは１８になり本来の力が目覚めるまで種族に関する一切の知識を与えてはならない』というものだ。
そもそも悪魔族として生を受けた者は、１８歳になるまで魔族としての特別な力は使えない。悪魔族は人間族を『襲って』その生命力を得る為、あまりに幼すぎると色々な部分が使い物にならないからだ。
また悪魔族は人間と共に生きなければならない為、エルフや竜族の様に種族同士で一箇所に集まって暮らすという事は無く、人間に紛れて国やその近辺に住む者が殆どだ。なので幼い頃から人間として生活させる事で、『大人』になっても上手く生きて行けるように様々な事を覚えさせる過程で、いっそ人間として生きさせてしまった方が理解が速いだろうという、いつの頃からかの風習も関わっている。
そのせいで１８歳になった途端起こる変化にジークリンデと同じく戸惑う者も多いが、それは所謂通過儀礼の様なものとして受け止められているらしい。何より目覚めた力は魔族としての『本能』なのだから、否応無しに順応してしまう。
因みに悪魔族の力が目覚める成人が人間族と同じ１８歳なのもまた、彼らとの関わり無しには生きていけない、特別な繋がりがあるせいだろう。

「…何も言ってくださらなかった事に関しては、分かりました」
「ありがとう。…イドゥベルガの事も、出来ればあまり怒らないで上げて欲しいんだ」
「…。…まあ、そういう事情があるなら…仕方ない事だとは思いますから」
絶対楽しんでたけどな、あの人！
それでも今更憤ったところで全ては後の祭り、責め立てたところでジークリンデがサキュバスである事も運命の星が男である事も何ら

変わりはしないのだ。
心の底から不本意で、未だ納得出来ないモヤモヤが胸の中に溜まってはいるが…何とかして上手く割り切らなくてはならないだろう。女の子とのイチャイチャにも未だ未練しか無いが、その辺りの感情の折り合いについては時間と共に解決出来る。と、信じたい。

「君は本当に優しい子だね、ジーク。彼女のやんちゃを許してくれてありがとう。お詫びと言うには少しも足らないけれど、他にも何か聞きたい事があるなら言ってごらん。話せる限りの事は、全部話すから」
「では…、運命の星について、もう少し詳しくお聞かせください。父様は母様の、その…運命の星、なのでしょうか？」

気にはなっていたが、実際それを直接尋ねるとなると妙に気恥ずかしい。自分が特別妙な変化をしている訳では無いのなら、イドゥベルガもメルヒオールに対して昨晩の自分の様な感情や欲望を持っているという事なのだから。
そもそも二人は夫婦なのでそういう関係があって当然、無い方が寧ろ問題なのだけれど…そこはそこ、例え前世と合わせて３７年分を生きていようと所詮は童貞且つ処女なのだ。耐性や慣れなんてものは一切存在しない。
必死で平静を装いながらも目線だけはあちらこちらへと動いてしまっていて、動揺していると一目で分かってしまう有様だった。

「そうだよ、君の言う通り。僕はイドゥベルガの運命の星だ」
「やっぱり…。…あの、差し支えないようでしたら出会った当時の事を少し聞かせて欲しいのですが…」
「うん、構わないよ。…イドゥベルガと初めて出会ったのは、今からもう２０年以上前になるなあ」

メルヒオールの済んだ水色の瞳が、ふわりと一層優しい色を湛える。傍から見ているだけで分かる。イドゥベルガとメルヒオールの間にあるものは、優しくて温かな感情に満ちているのだと。

「当時僕はリストン王国の学校に通う学生だったんだよ。ずっと興味があった学部で勉強する為に実家を出て一人暮らしをしていたんだ。それがある夜、突然彼女が部屋の窓から入ってきて…」

『やっと見つけたわ、私の運命の星！』

彼女はその美しいかんばせを一層輝かせ花の様な笑顔を浮かべると、あまりの急展開に硬直するメルヒオールを問答無用で連れ去ったのだという。

「（えええええ母様あああああ！？）」

「そのまま王国の外れにあった彼女の家まで連れて行かれて…なんだかんだ三月くらいそのまま過ごしたかなあ。最初の頃は出歩くどころか庭に出る事すら許してもらえなくて、ちょっと大変だったんだよー」

「そ、それって…拉致監禁と言いませんか…？」

「うん？　んー…そういえば、そうとも言うかもしれないねえ」

そうともじゃなくてそうとしか言わないよ！？　この世界でも拉致も監禁も立派な犯罪になりますからね！？

…もしかして悪魔族が運命の星を連れ去ろうとするのはデフォルトなんだろうか。若干身に覚えがあるのが辛い。連れて帰って閉じ込めたいなんて思ってしまっていたのは、遺伝的な何かな気がしてならない。

「（あの時理性を取り戻せて、本当に良かった…！）」

何をどうしたら二人の関係が今に至ったのかは想像もつかないが、俺には湖の君（仮）を拉致った後で仲良くなる自信は欠片も無い。母様…色々とはっちゃけた人だとは思ってたけど、あれが素なのか。通常運転だというのか。あの嫌がらせとしか思えない所業の数々は愛の鞭なんじゃないかと思ってた時期が、私にもありました…。

「僕からも一つ聞きたい事があるんだけど、良いかな？」

「え、あ…はい、もちろん」

「ジークがそんな風に落ち込むのは、自分が人間じゃなかった…ってだけじゃないみたいだね。運命の星について、かな？」

「う…」

…バレてる。父様の言った通り、自分が人間では無かったという事実にはそれはもう驚きはしたけれど…幸か不幸か、びっくりが大き過ぎて落ち込み分が割り振れなかったのだ。これ以上落ち込んでいられる余裕が無かったというのもある。

「ええと…、…そう、です。なんというか…その、恋とか愛とか、そういう類のものは、自分にはまだ縁遠いとばかり思っていて…」

まさか相手の性別が男だったからこんなにも落ち込んでいるなんて、冗談でも言えない。

「…ジークは悪魔族としての力に目覚めてまだ間もないから、戸惑う事も多いだろうけれど、今はまだそこまで深く思い詰めなくても大丈夫だと思うよ」

「え…」

「イドゥベルガからも聞いていると思うけれど、運命の星というのは本来、探し出すのにとても時間がかかるものなんだ。悪魔族として目覚め、それまでとは違う色んなものに上手く順応して折り合い

をつけてから、何年も人生を重ねている内にいつか出逢うかもしれない、そんな存在なんだよ。君の場合は…それが少し早すぎてしまって、やらなければならない事が一度にたくさん生まれてしまったけれど…」

「…」

「運命の星は確かに悪魔族にとってとても大切な存在だけど、それが全てってわけじゃない。ジークはジークのやりたい事をめいっぱいやって、それからでも充分遅くはないよ。…相手の人との事で悩むのもね。君はまだその人について知らない事ばかりだろう？　あれこれ悩むのは、その人ともっと深く知り合ってからの方が良い」

「とうさま…」

「分からない事に悩んだってどうしようも無いさ。いつかその悩みが必要になった時に、精一杯考えれば良い。そしてその時に自分にとって最善の選択が出来るように、少しずつでも色んな事を受け入れて、努力するのが今だと思うよ。…なんて、かなり投げやりな励ましになってしまったけれど」

「いいえ…」

心の片隅にでも覚えておいてくれると嬉しいなあ、なんて苦く笑うメルヒオールはかけてくれた言葉の価値を本当に理解しているだろうか。たくさんの重苦しい悩みでいっぱいだったジークリンデの心が、どれだけ軽くなった事か。

…今の自分には、『分かっている事』と『分からない事』がある。分かっている事は、自分が悪魔族のサキュバスだと言う事。人間とは違うルールや性質に、上手く慣れていかなければならないと言う事。

分からない事は、運命の星のあの人について。思えば名前も知らないし、どこに住んでいるのかも。どんな性格なのか、何が好きなのかとか…本当に何も知らない。

ならば、分からない事で悩み続けるよりも分かる事から順に解決していくべきだ。
あの人とはまたいつか会える日が来る筈だ。何しろサキュバスとして目覚めたその日に出逢ってしまったくらいなのだから、割とあっさり再会出来るかもしれない。…あまり早過ぎるのも困るけれど。
そしてその時、今度こそ問答無用で押し倒したりしないように、突発的に誘拐したりしないようにする為にも。
今するべきは、一人の人間、ではなく悪魔族として一人前になる事だ。
やるべき方向性が見えてきたなら話は早い。周囲には誤解されがちだが、元来彼女は物凄く楽観的な性格だ。『なんとかなる』は前世から続く座右の銘である。

「父様、ありがとう」

イドゥベルガとメルヒオールの色を強く受け継いだ美しい顔立ちに、漸く以前の様な朗らかな笑顔が戻ったのを見て、メルヒオールもまた安心した様に笑い掛ける。
…漸く落ち着きを取り戻し、メイドが淹れてくれた紅茶の香りを楽しむ二人に共通する心配事は、未だ戻らないイドゥベルガが妙な問題を起こしていないか、その一点に尽きるのだった。

四話：一難去って、また（後書き）

説明回すみません＼（＾０＾）／
一応ファンタジー世界設定なのでね、どうしても必要になってきますよね…うん…。
とりあえずこれ以外の設定なんかはお話が続くに連れて必要になったときに出していきます。

五話：統計二度目の生命の危機

父・メルヒオールとの話し合いの中で、様々な問題や気持ちの切り替えに上手く踏ん切りをつけられるようになってから早数日。
前向きに、と言えば聞こえは良いものの、要は以前の楽観さが倍になって戻ってきたみたいなもので、今は魔族としての新しい日常に一日も早く慣れるように努力する毎日を送っている。
…まあ、悪魔族としての力が目覚めたからと言って特別何がどうなると言う事は、あまり無い。姿形がどう変わるって訳では無く、魔法だって今まで通り扱う事が出来る。唯一生きていく為の栄養源が食事から人間の生気に変わる事と、それに付随する諸事情に個人的に悩む要素があるというだけで、それ以外は人間だった頃と何ら変化は無かった。若干拍子抜けするくらいに。
ポジティブモードで向き合ってみたらなんだ意外と、なんて思っていたその矢先。
唐突にその問題は発覚した。

「困ったわねえ…」

我が家の女帝にしてトラブルメーカー、母・イドゥベルガまでもが今度ばかりはと言った風に眉を寄せる。
その眼前、ラベンダー色のお気に入りのベッドシーツに埋もれたジークリンデの顔色はお世辞にも良いとは言えない。
異変に気付いたのは数日前。なんとか解決しようと一人奮闘するも虚しく、『それ』は遂に両親にも伝わる事になってしまった。

「知り合いのサキュバス達にも聞いてみたけれど、やっぱり心当たりは無いらしいの。…色んな状況が重なって、ジークちゃんだけ特別こんな風になってしまったのかもしれないわ」

「…ご迷惑おかけしてすみません、母様…」
「良いのよ、貴方は私の可愛い娘なんだから。…でも、困ったわね。このままだと本当に危ない状態になってしまうわ」
普段より幾分か艶を失った銀髪を白い指先が慰めるように梳いていく。優しい手付きにうっとりと目を閉じながら、それでも解決する兆しは一向に見えない。
「貴方がまさか、食事を受け付けないなんて」
薄い腹のどこから出ているんだと思うくらい盛大に腹の虫が鳴く。醜態など気にしている余裕も既に無かった。
…そう、ジークリンデはあの日、あの湖の畔で自分の運命の星と初めての食事をして以来、一度も他人の生気を食べてはいないのだ。正確には、食べていないのでは無く食べられない。
様々な悩みを一先ず解決させてから、ジークリンデが最初にやろうとした事は食事に慣れるという事だった。悪魔族として目覚めてしまった以上は、否が応でも人間の生気を食べねばならない。そうしなければ生死に関わってくるのだから。
そして、メルヒオールから有り難いお言葉を頂いたその日の夜。部屋の隅で座禅を組み、心頭滅却し、腹を数回括った後、ジークリンデは遂に悪魔族としてのちゃんとした最初の食事、同時に37年間の宿願を果たす。…筈だった。
「（うう…、悔しくてもう涙も出ない…）」
結論から言って、ジークリンデはその日、食事をする事も、処女喪失する事も、当然ながら童貞卒業する事も無かった。
相手に選んだのは、お馴染み深夜徘徊で見かけた、下町で働く娼婦

のお姉さんだった。
何度も言う様だがジークリンデは処女かつ童貞、あはんなアレやうふんなコレを誰かに対して行った経験は皆無なのである。そうなると相手も同じ初めての女の子だとなんだか緊張度が増してしまうし、やっぱり一般感覚としては初めては好きな人と致したいところだろう。初対面且つ一夜限りになるかもしれないのに処女を貰ってしまってはこちらとしても少々心苦しいものもある。男に関しては童貞だろうが非童貞だろうが全面的に却下。
そうした取捨選択の結果、割とあっさりジークリンデの初めてのお相手は決定されたのである。百戦錬磨なお姉様に弄ばれるのも悪くは無い、いや寧ろ遊ばれたい。ちなみにこの辺りは完全に個人の感性の違いなので深く掘り下げないでください。

ともかく、相手を定めたジークリンデは早速母親に教わった通りの事を実行した。彼女がもう早朝と言って良い時間、漸く眠りに落ちたのを見届けてこっそり人生初の不法侵入を成功させ、ベッドで熟睡する彼女を起こさないように近付いた。
けれど。
完璧据え膳状態でベッドに横たわる女性を前にしても、少しの食欲も沸かない。なんというか、何をどうしても手を出す気になれないのだ。避けては通れない道だと言い聞かせてみても、彼女に伸びる手はどうしても途中で萎れてしまう。過去例に見ない程、ジークリンデの中の本能的な部分は沈静化していた。
しかし沈静化されてしまったのは何も食欲だけでは無かったのだ。
気付いたジークリンデは戦慄した。それはいつかのあの日、運命の星相手に初対面から数秒後にはディープキスをかましていた時に感じたものと同種の恐怖だった。自分の芯とも呼べる部分があまりにも脆く崩れ去っていく感覚。
…そう。ジークリンデは、こんな無防備な女性を目の前にしても、少しもムラムラしなかったのである。

「（不能…インポ…インポテンツ…）」

誤解の無いよう断っておくが、ジークリンデがこんなにも憔悴しているのは、諦めずに数回試みた『食事』が全て失敗に終わってしまったからである。別に自分が不能になってしまったんじゃないかというショックのせい、だけでは無い。

「もしかしたらジークちゃんのその症状は、一番最初の『食事』から運命の星を相手にしてしまったせいかもしれないわね」

「え…？　それは、良い事…なのでは無いのですか？」

「単純に悪魔族と運命の星との関係だけを考えるならばこれ以上無い幸運の筈なのだけれど…。運命の星はその悪魔にとっては最高の恋人であり最高の餌だって事は分かってるわよね？　つまり、それ以外の人間の味はどうしたって星よりは劣っているという事になるわ。一番最初にこの世で一番のご飯を見つけてしまったから、それ以下のものを無意識に受け付けなくなってるのかもしれないわね…」

「そんな事が…」

つまり今の自分は、例えは悪いが一パック３００円ちょっとの苺の味に慣れるより先に一粒数千円くらいする最高級苺を食してしまったせいで、スーパーで大量に売られている苺達を無意識に回避しているというのか。なんというセレブ舌。信じられない、いくら家柄が良かろうと味覚と金銭感覚だけは庶民だと信じていたのに。

「勿論、別に原因がある可能性も捨て切れないけれど、今のところこの仮説が一番有力な気がするわ。それ以外にジークちゃんの症状の理由が思い浮かばないもの…」

中々食事が出来ない成人したばかりの悪魔族、というのが、何もジ

ークリンデが初めてだった訳では無い。寧ろそういう傾向は良くあるくらいなのだけれど、その場合の症状というのは『人間の生気を餌にする』という行為そのものに対して抵抗がある場合ばかりなのだ。ジークリンデのように『食べる気満々だけど身体が受け付けない』というのは、成熟した悪魔族であるイドゥベルガにも初めての経験らしかった。

「解決策としては…一刻も早くジークちゃんの運命の星をもう一度見つけ出すか、数撃ちゃ当たる戦法でとにかく片っ端から挑戦してみるしか無いわね。それで、早速提案なんだけれど」

「…これは？」

イドゥベルガがジークリンデに差し出したのは、一通の白い封筒。赤黒い蝋で封がされており、一目で品の良さが伺える。封筒を破らないようにそっと開けば、中に入っていたのはこれまた高級感溢れる手のひらサイズより少し大きなカードだった。

「クラッセン家…、夜会の招待状？」

「急な話だけど、今晩クラッセン家が主催になってお屋敷の方で結構な規模の夜会が行われるのよ。この辺りに住む貴族の令嬢子息達はほとんど参加するみたいだから、そこでもう一度いろんな人に挑戦してみるのも悪くないんじゃないかと思って」

「夜会…。そういえば、ほとんど参加した事がありませんでしたね…」

「ええ、同年代の子達とお話をすればちょっとした気分転換にもなるかもしれないし。それに、ジークちゃんの星は同い年くらいの男の子なんでしょう？　もしかしたら、その夜会に参加するかもしれないわ」

「！」

そうだ。宝石のように磨かれた容姿やきっちり整えられた服装からして、彼はほぼ間違い無くそれなりの家柄の子息だろう。
今までは何となく場違いなのではないかと無意識に夜会やお茶会など同年代の貴族の人達との交流の場には行かなかったから、そういう方面に殊更弱い自覚はある。
もしかしたら割と有名な人かもしれない。あんなに美しい顔立ちならばイケメンに目が無い世のお嬢様方がまず見逃してはくれないだろう。
自分は彼との再会への一番の近道をずっと通らずにいたのかもしれない。

「（…ってえ！　何考えてんだ自分！　腹減り過ぎて遂に頭までやられたのか！？）」

違う、違う違う全っ然違う。自分は特別彼との再会を望んではいない、寧ろ全力で回避したいくらいだ。
別に彼が貴族達の間で有名だろうが無名だろうがそんなものは全く関係無い、調べる必要も無い。例え見つからなければ死ぬかもしれなくてもだ。
いくら運命の星だなんだと言っても、ガチで生命の危機が訪れれば誰とだって出来る筈だ。ただし男以外でお願いしたい。

「どうかしら、ジークちゃん」
「…そう、ですね…」

もしかしたら、夜会の場で湖の君に再会してしまう危険はある。が、そのリスクを負ってでもこの症状はなんとかしなければならないだろう。今はまだ力が目覚めたばかりとあって普通の食事でも多少は補えているけれど、それもいつまで持つか分からない。それまでになんとか症状を改善しなければ本当に餓死してＢＡＤ　ＥＮＤ確定

だ。こんなチート紛いのスペックを持ってしてまで童貞のまま終了とか嫌過ぎる。どんだけ縁遠いんだ。
…それに、思い出せジークリンデ。この世界に生まれ落ちて一番最初に望んだ事を。
そう。

『某ラノベ主人公の如く可愛い女の子に囲まれて性春を謳歌し尽くしたい！』

夜会に参加というイベントは、もしかしなくても夢実現への第一歩なのではないだろうか。
だとすれば、これを敢えてスルーするなんて愚策以上の何物でも無い。

「夜会に参加します、母様」

食生活の問題も解決して、可愛い女の子ともお知り合いになれちゃったりすれば、これぞ正に一石二鳥。

「（待ってろよ、まだ見ぬ俺のお嫁さん！）」

こうしてまたも不純極まりない動機で、ジークリンデの行く先は決定した。
割といつもの事である。

五話：統計二度目の生命の危機（後書き）

お…久しぶり…です…|（：３　」∠　）|
いろいろと忙しくて書いてる時間がありませんでしたちくしょう＼（＾０＾）／
しばらくは低速更新になるとは思いますが、なるべく間を開けないように頑張りたいです（希望）！！！

今回はちょっとしたインターバル回？
次から新キャラ出ますー。それにしてもいつになったら運命の星の名前が出るのか（ｒｙ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3355w/

You Are Delicious！

2011年11月28日03時48分発行